

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会会報編集委員会 委員長 横田尚義 印刷 常陽新聞新社

アカンサス (右の写真)

ギリシヤ建築の三様式の一つであるコリント派の建築物ではアカンサスの葉をモチーフにした柱頭に特徴がある。

本校旧本館の設計者駒杵勤治はギリシヤ建築へのあこがれから、ここの正面両端の切妻屋根の頂部装飾にこれを使ったのは想像に難くない。

旧本館西側の花壇では、毎年梅雨の季節になるとアカンサスの白い花を觀賞することが出来る。



撮影・説明 奥村 好太郎 (高6 回卒)

土浦一高校歌

堀越 晋 作詞
尾崎 楠 馬 作曲

一、沃野一望数百里 関八州の重鎮とて
そそり立ちたり筑波山 空の碧をさながらに
湛えて寄する漣波は 終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川 其の源の香を載せて
流に浮ぶ花筏 蘆の枯葉に秋立てば
渡る雁声訝えて 湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて 我に寛雅の度量あり
此の秀麗の氣を享けて 我に至誠の精神あり
東国男児の血を享けて 我に武勇の氣魄あり

四、筑波の山のいや高く 霞ヶ浦のいや広く
嗚呼 桜水の旗立てて 我が校風を輝かせ
亀城一千の健男児 亀城一千の健男児

目次

- 2面 平成15年度総会報告
会長あいさつ
- 3面 学校長あいさつ
- 4面 「自分らしく、今を生き切る」
ダイエー会長
- 5面 恩師を訪ねて⑧
菅澤虎彦先生 (昭和23～40年)
- 6面 卒業生レポート⑧
久保田忠夫 (高17回)
- 7面 支部だより
- 8面 お知らせ・お便り
- 9面 母校だより
- 10面 職員室だより・各部だより
- 11面 進路だより
- 12面 平成14年度決算報告等

平成十五年度

進修同窓会
総会開かれる

去る四月十三日(日)、平成十五年定期総会が、新築されたばかりの母校体育館にて約三〇〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

開会の前に、昨年度の総会にて学校への寄贈が了承されました緞帳(左の写真下)が、同窓会員の皆様に初めて披露されました。この緞帳は、本校生徒藤崎佐保里さん(現在三年生)のデザインによるもので、大自然を大胆に描き、漲るエネルギーを感じさせる傑作です。

総会は、まず、応援団の指揮のもと、吹奏楽の演奏に合わせ、校歌と一高賛歌の斉唱、物故会員に対する黙祷の後、幡谷会長、山田校長の挨拶があり、青山和義副会長を議長として以下の議案が審議されました。

- 一、平成十四年度事業報告
- 二、平成十四年度決算報告

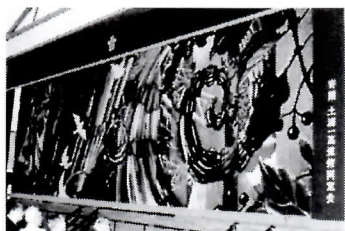
会長あいさつ



祝賀式にて記念品贈呈



本校生デザインによる緞帳



- 三、平成十四年度基金決算報告
- 四、別途積立金報告
- 五、平成十五年度事業及び活用委員会事業計画
- 六、平成十五年度予算
- 七、平成十五年度基金予算
- 八、その他

十分な審議の後、全議案とも満場一致で可決・承認されました。閉会の後、引き続き母校の新体育館で恒例の卒業周年祝賀式が開かれました。

本年は、中四十二回(六十周年)、高五・定三回(五十周年)、高十五・定十三回(四十周年)、高三十・高理七・定二十八回(二十五周年)の方々をお招きしました。

祝賀式では、高六回で来年五十周年を迎えられる鈴木親雄氏より祝辞が述べられました。招待者への記念品贈呈の後、三年制の新制高校としての第一回入学生である高五回卒の御田寺義也氏より、本年五十周年を迎えられた皆様を代表して謝辞が述べられました。また会場を別にしての祝賀会では、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。

同窓会会長あいさつ

—土浦一高の諸君へ—

会長 幡谷 祐一



文武両道ということがここ二、三年、喧しく言われています。文という点、表面的には軟弱を思わせ、武は剛を連想させます。昔、文弱の徒という言葉がありました。が、今の母校は日本屈指の進学校となり、世間的には軟弱に見られていることもあるかと思えます。

しかし、今夏の高校野球で八強入りしたことは素晴らしいことであり、正に文武両道を天下に知らしめたと言え、在校の生徒諸君の前途も一層明るさを増したものと推察されます。

社会人となって生きていくためには、健康体であることが最大の条件であることは今も昔も変わりません。そのためには若いうちからの体力づくりが求められます。自分を律することのできる人が残っていくでしょう。将来、懇親という名目の下に飲酒する機会が度々出てくると思いますが、程々に切り上げるのも大切なことです。

西洋の諺に「一杯目は人、酒を飲み、二杯目は酒、酒を飲み、三杯目は酒、人を飲む」とあります。が、含蓄のある言葉です。今は他人事のようにもあつた、五年で、このようなことが現実として迫ってくるでしょう。自分が気を付けておれば、また節度を心得ることにより、人生は光輝くものになると言い切れます。

私は、昭和十六年、中学四十回の卒業であり、今年八十歳になります。若い頃から注意していたお陰で、今年八月の十日間にわたる人間ドックでも、指摘は全くなく、担当医も驚いておりました。ここ三十年ほどは風邪一つひいたこともありません。

仕事においても、毎日朝八時に出勤して、夕方は六時半まで現役として企業を先導しております。遅刻をしないことなどは勿論のこと、社員と同様に出勤簿にも押印して、自分の考え、姿勢を示す一つとしております。経営者として先ず留意すべき点は、部下に求めることは自分にも求めよと心得、いつも自分を戒めています。

何れにしても社会は曖昧を許しませんので、独りの力で生きるという覚悟を持つことです。先輩、同僚は多くいても、誰でも最後は自分のことが優先であり、他人のことなどがまわって来ないものです。健康同様、頼れるのは自分だけです。

けだど自覚することが求められるのです。

一方、文のほうでも、成人した後に、若いうちにもっと勉強しておけばと誰でも多少なりとも思うものです。私などはその最たる者と言え、中学時代はいつでも低空飛行でした。しかし、人生はある時、何の前触れもなく、突然に何か起こるものです。私は平成五年の七月から、漢詩に取り付かれました。七十歳のときでした。

それからというもの、まるで憑かれたように日夜詩作にのめり込み、「平成自由詩」という名を冠した「水車」「山寺」の漢詩集二冊を刊行しました。周囲の者は勿論、私自身予想もしなかったことでした。勉強は杜甫や李白の名文を誦んじることが第一と言われたので、これに挑戦し、現在では「春望」などの名詩百二十編余りを完全に誦んじることができました。高齢であるうともやる気があればできることを自ら実証したことに満ち足りたものを感じております。

多くの若い人たちにも、今このような勉強をすることが大事であると、自らの経験を通して伝えております。ワープロの普及等による活字離れが、美しい日本語の数々を捨て去ることにつながっていることを嘆く者の一人として、今後もこのような分野への関わりを続けていきたいと考えております。

日本を代表する我が母校の皆さん、正に文武両道、「楠之詩」にあるような先人達に負けない気概をもって歩んでください。青春に悔いなしと言えるように。

同窓会会報に寄せて

学校長 山田 隆 士



校庭の木々も色づいて、秋の気配を感じさせる今日この頃となりました。進修同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、日頃は本校の教育活動に深いご理解と温かいご支援をいただいております。ここに心から御礼を申し上げます。

お陰様で本校は、創立一〇六年という長い歴史と良き伝統を継承し現在に至っております。また、卒業生はもとより、現役生にとりましては心の古里といえる旧本館は、来年度、竣工一〇年目を迎える節目の年となります。

このような折り、私事になりましたが、前校長のご退職の後を受けて、茨城県教育庁教育次長から母校の校長に就任することとなりました。高校卒業後は、長く本校から離れておりましたが、校長として赴任早々、教職員の皆さんと一人一人面談した際、多くの先生方が「本校で教鞭を執れて、教師として幸せである」と自信と誇りに満ちていることを頼もしく感じると共に、日々、生徒の活動等を見ていると将来を託するに十分な素質を持った生徒集団であると確信を持つに至りました。併せて、その任の重さを痛感している今日この頃でございます。どうか今後と

もご指導とご鞭撻のほどをお願い申し上げます。

ここで本校の近況につきまして三点ほどご報告をさせていただきます。

第一は、今年度の入試状況でございます。本校の近年の実績は目覚しく、東大三十二名(新卒二十二名)が合格しました。この結果、五年連続で三十名台を堅持し、全国公立高校中の第二位に位置しています。残念ながらライバル校である岡崎高校の三十八名には及びませんでした。京都大に四名(新卒一名、一橋大五名(新卒四名)、東工大十二名(新卒七名)、東北大三十二名(新卒二十名)、筑波大四十四名(新卒三十二名)の合格者を出し、健闘いたしました。特に、東北大の三十名台は本校初の快挙であります。また筑波大は全国第一位の合格数となっております。この結果、新卒生徒の国立大合格者は数年の壁でありました百二十を超えて百二十三となりました。また、私学におきましては、早稲田大九十九名(新卒五十七名)、慶応大五十一名(新卒二十七名)、東京理科大学三十三名(新卒四十六名)の合格者を出しています。ただ、この合格者数に対して、進学率についてはここ数年五〇%台で推移しており、今年度は五五%に終わっております。

これは、超難関国立大を第一志望として他を受験しない、私立大を併願しても第一志望を目指して進学しない、という構図が根強いというのが現状であります。このような中、従来設置されていた理数科が今年度から完全に姿を消し、受験者数が一学級分減少する

来年度入試から、この数字を維持できるかどうかが課題となっております。

第二に、生徒の活動については自主的活動が活発に行われており、本校の三大行事である「一高祭」「一高オリエンピック」「歩く会」などでは、生徒が自主的に実行委員会を組織し、企画・立案の段階から運営・実施、反省・評価に至るまでを取り組んでおります。今年度の「一高祭」は、『百華繚乱』というテーマで行われ、生徒それぞれが個性を発揮して盛大に開催されました。また、「一高オリエンピック」「歩く会」についても、体力に応じ、或いはチームワークを発揮し全力で挑戦する姿勢には心強いものを感じました。

また、部活動については、加入率が約八〇% (文化部・約三〇%、運動部・約五〇%)で、県内でも有数の学校と言えます。この中で特筆に値する活躍と言えば硬式野球部と軟式野球部があげられます。硬式野球部は、夏の大会で四十二年ぶりにベスト八を果たし、その勢いは止まらず秋の大会においても四十三年ぶりにベスト八に入って公立高校の意地を示しました。特にここ二年間は、新体育館の建設に伴い、運動場を整備するために本校グラウンドが使用できず、櫻川の河川敷を借りての練習というハンディを背負っての好成績であり、巷では「二十一世紀特別枠」で春の選抜に甲子園出場を果たせるようにとの期待の声が高まっている現状にあります。また、軟式野球部についても県大会六回目、三十三年ぶりに優勝し、北関東大会出場を果たしました。同大会では、栃木県の新学院との第一回戦で敗れたものの、地区予選を無失点できた同校に対し、本校は貴重な一点を獲得して一矢を報いたと聞いて喜びました。この他にも、ヨット部、

弓道部が関東大会に、囲碁部が全国大会出場と活躍しています。

第三に、施設整備面について申し上げます。新体育館が今年一月に竣工し、卒業式及び入学式を挙行することが出来ました。今後の予定としては、旧体育館や運動部室等の解体に對して、部室の新築及び新体育館周辺の外構工事等と併せて旧本館の塗装工事が行われることになっております。

前述のとおり旧本館は、明治三十七(一九〇四)年七月に上棟式が行われ、翌年三月に完成したもので、来年度が竣工一〇〇年に当たる記念の年となります。昭和五十一(一九七六)年には国の重要文化財に指定され、卒業生にとっては思い出溢れた心の古里であり、在校生にとっても歴史と伝統の学舎として誇りと自信の象徴となっております。また、一般市民の方々も数多く訪れ、文化遺産として親しみをもって見学されております。

この陰には、同窓会の旧本館活用委員会の皆様の並々ならぬご研究とご努力があることに深く感謝を申し上げます。外観は昔のままですが、内部は旧職員室を初めとして、旧教室等が展示室として整備され、本校の歴史と良き伝統の重さを感じ取る空間となっております。在校生にとりまして、復元教室での授業、弦楽器の演奏会場、生徒の絵画作品の発表の場等に活用されており、時代を超えて本校のシンボルとなっております。

最後に、これからの本校の課題等について若干述べます。現在の進学実績を維持・発展させるなどどのような人間の育成を図るかと言うことであります。大学は出たが社会で通用しないという話を聞きます。このような指摘に対して、本校生は真に今後の社会をリードできる人間に育って欲しいと願っています。特に、現在の世界を見るとき、グローバルな政

治、経済、社会にあつて、地球の平和と繁栄のために寄与できる人材の輩出こそが我が国の発展に繋がるところであり、その一端を本校が担っていくと言っても過言ではないと思っています。今後ますます国際化、高度情報化、少子・高齢化等の中で、社会に貢献でき、知徳体のバランスのとれた人間として成長するよう、生徒達には日頃から「あいさつする」「ルールを守る」「思いやりの心を持つ」という三点の実践を呼びかけています。幸いにして本校の生徒は、誠実で素直な性格の持ち主が多く、主体的で、自らの判断により行動できる素質を有しています。要は、その素質をいかに磨くかであり、妥協を許さずにより高い知性と徳性を備える切磋琢磨の機会を生かせるか、と言うこととなります。そのため、昨年度から導入された学校評議員制度の活用や学校評価のシステム化に現在取り組んでいるところでございます。

また、本校及び本校の目指す教育を今年度の学校案内パンフレットでは、次のように位置づけて意識の高揚を図っています。

＊本校は、「百年の歴史と伝統」を有し、「自主・独立の気風」を継承しつつ、「高い理想と自己実現」を目指す『未来を拓く、若人の学舎』である。本校生徒たる者は「BE A CREATOR OF THE FUTURE」であれと呼びかけています。

以上が主な学校の様子であります。本校の発展は、時代を超えて旧本館で学んだ同窓会の皆様方が築きあげられたものであり、心から敬意を表すると共に、厚く御礼を申し上げます。併せて、その任の重さを痛感している今日この頃でございます。どうか今後ともご指導とご支援をお願い申し上げます。ご挨拶、ご報告と致します。

自分らしく、今を生き切る

ダイエー会長

雨 貝 二 郎

高十六回(昭和三十一年卒)



二十一世紀の日本を考えるに、変化を疎んじる年配者や怠惰な若者が臆病な毎日を選好し、これが社会の大勢となれば、その将来は危うく、逆に、指導者が失敗を恐れず日本の改革に取り組めば、明るい未来を拓くことができる。

近年の土浦一高は、週刊誌の大学合格ランキングで、毎年上位を占め、日本全国にその名前が知られるなど、一目置かれる存在となっている。在校生はもとより近時の卒業生は自他共に認める天下の秀才であり、早晚、国内外の大組織において、指導的な役割を担うことになるであろう。それだけに、土浦一高の若き在校生、卒業生には、自らの彫琢を怠らず、人真似でなく、個性的に、今を悔いなく生きてもらいたい。

この願いを込め、少しでもお役に立てばと思い、高校以降の自分自身の軌跡を顧み、そこから抽き出した教訓をお伝えする。

そばだてる中、卒業生を代表して、「日本国民は国際社会において名譽ある地位を占めたいと考えており、我々もその一翼を担う覚悟である」と、気負った答辞を述べた。土浦で生まれ、土浦小学校、土浦一中、土浦一高と十八年を土浦で過ごし、いよいよ大学受験が間近に迫り、翌月からは、故郷を離れ、東京で新しい生活を開始する予定であった。土浦一高の三年は、専ら勉強の毎日であった。友人と二人で授業をこっそり抜け出し、水戸までヒッチハイクで野球の試合応援に出掛け、これが後日発覚し、ナポレオンと呼ばれる厳しい数学担当の菅澤教頭からこっぴどく叱られるなどの武勇伝もあったが、ひたすら勉強に没頭し、それが少しも苦痛ではなかった。年数回、校内実力テストがあり、成績順に名前と総合点数とが廊下の壁に張り出され、毎回随分と気になったが、幸い一番が指定席であった。全国レベルの腕試しとしては、増進会の通信添削、東大学力コンクールなどが人気であり、時折成績優秀者として名前が載ることもあったが、校内試験に比し、水準が高く、歯が立たないことも多かった。今以て、土浦一高で学んだ知識が教養の土台となっており、その有り難さを実感している。

東京大学に入学したが、大教室での授業に嫌気が差し、専ら四畳半の下宿で、内外の小説、哲学、数学、経済学等の専門書を読み漁るほか、頻りに友人と酒を酌み交わし、夜通し人生を論じ合った。経済学部に進んだからは、麻雀、酒に熱中し、相変わらず教室には出なかつたが、大学院への進学を目指して、熱心にゼミに参加し、専門書の乱読を続けた。授業も出ず、教師の考えをろくに理解せずには試験を受けるものだから、成績は振るわず、優より良が多かった。ただ、自己流の勉強の成果であらうか、ゼミの木村教授からは大学院進級を認められ、また、国家公務員試験も一桁の順位であった。

大学四年の夏、進路を決める時期になり、父親は民間企業への就職を希望し、自分では大学院への進学を考えていた。結局、経済学の知識が役立ち、かつ、留學も出来る職場というところで、いわば企業と大学との中間的な組織だと思われた役所を選び、また、役所の中でも、面接を受けに上京する折、偶々土浦駅で出会った友人の助言もあり、通産省に入ることとした。

公務生活では、公平としての正義を指針とし、現状を変える新しい施策の実現に取り組み、多くのことを学んだ。この公務生活に悔いはない。創立百周年記念誌『進修百年』でも述べたが、通産官僚としては、第一に、官僚自らがその職責をどう果たすかによって、仕事の内容やその影響する範囲が大きく相違し、担当官一人一人の人生観・価値観が色濃くその仕事振りに表現されると考え、国益は何かを常に確認しつつ、心を込めて仕事をし、第二に、非常識な言動は公務員らしくないが、時には常識に捕らわれず、信念に基づき大胆に行動し、非常識との批判を甘受してでも、常識の限界を超

え、世直しに努め、第三に、その裏付けとして、将来ビジョンを行政官としての様々な思いを込めた数字で表現するよう留意した。

この公務生活を卒業してダイエーに天下りをすると、我ながら想定しなかつた事である。ダイエーが我が国流通業の近代化に果たした役割は極めて大なるものがあり、かつ、とりわけ中内ファウンダーの、消費税導入問題への対応など、国家に対する顕著な貢献を目の当たりにしたこともあり、意向打診を受け、一瞬怯みもしたが、再建に少しでも役立つなら、敢えて火中の栗を拾うことも男子の本懐だと受け止め、即断した。ただ、「昨日まで天下国家を論じていた高級官僚が、一夜明ければ大企業の役員では附に落ちない」と自ら公言したし、今でもこの考えは些か変わらない。ダイエーでは、商売の経験のない者に出ることは限られており、大所高所の視点から「大事」にのみ、専念したいと考えている。一日も早く再建を軌道に乗せ、自らに課した役目を無事果たすことを冀っている今日この頃である。

大学での四年、公務生活の三年、ダイエーでの三年、歳月はその歩みを止めることがない。そして、私の人生は、我流を貫く連続であったが、その時々を自分なりに真剣に生きてきた。この自分らしく、今を生き切る人生について、「自然体で挑戦する」ことだとの考えを披露(2000・2・10産経新聞(夕)わたしの人生訓)したことがあり、少し長いが、全文を引用し、締め括りしたい。

難問を解き、難関に合格し、困難事を突破する、これが人生の全

てだと思ひ込む時期もあった。四十代半ば過ぎに転機を迎えた。知的障害を持つ娘が普通学級での義務教育を終了するに当たり、障害者と健常者との間にある越え難い深い溝を実感し、また、父、義母、妻、母の四人が一年余の間に続けて亡くなり、死を日常的なものとして受け入れるに至った。

眼前に新しい風景が現れた。若さに溢れ、明日を夢見る人生は今日が留守になる。昨日を悔やんで今日の老いを嘆く人生は明日がない。現在をあるがままに受け入れ、悔しさの過去と決別し、将来に向け、今が一番若いと自覚し、未来へ果敢に挑戦する、これが自然体で挑戦することだ。

オックスフォードでロールズの正義論にのめり込み、ラジカルな改革に挑戦する決意を固め、四半世紀が過ぎた。また、この十年、時に老子を繕き、空海に学び、神秘体験の思想に親近感を覚え、人間をそのまま理解し、受け入れたと努力してきた。西洋の知性と東洋の情とを自らのものとして生きる、これが自然体で挑戦する人生だ。

活躍を期待する。

【略歴】

45年4月 土浦生まれ
64年3月 土浦一高卒業
69年3月 東京大学経済学部卒業
69年4月 通産省入省
75年7月 オックスフォード大学卒業
82年11月 東京工業大学講師(併任)
85年10月 大規模小売店舗調整官
94年6月 石炭部長
97年1月 人事院公務員研修所長
99年7月 人事院公務員局長
00年12月 退官
01年1月 ダイエー会長

恩師を訪ねて

⑧

数学菅澤 虎彦先生

(現在八十九歳)

在職 昭和二十三年三月～三十五年二月(教頭)
昭和三十五年三月～四十年三月(教頭)

平成十五年八月五日菅澤先生宅
訪問(大山教頭Ⅱ十八回卒・飯竹
教諭Ⅱ三十一回卒)

—先生が土浦一高に赴任された
ころは、どんな様子でしたか？
【菅澤】昭和二十三年当時のこと
だが、生徒がともかく勉強をしな
いんだ。一高も昔は東大に何人か
入っていたが、当時は水戸や太
田、下妻、海道よりも勉強が出
来ないほどだった。どうにもなら
ないほどだった。これにはダメ
だ、何とかしなければ、と強く
思った。

その当時の事情でかなり多くの
生徒が入ってきていた。できるも
のは東京の私立か水戸へ行ってし
まう。その残りが来ていたんだ。
調べてみたら、水戸一高へ入れる
成績の生徒は、土浦一高では一組
の人数もいなかった。これじゃだ
めだ、との思いで、能力別クラス
編成をやった。職員会議にかけた
らまとまりつこないから、密かに
進めた。私が学年主任をした昭和
二十六年入学生、高六回生だが、

この学年全部を、上から五十番ま
で、百番まで、下から五十番ま
で、百番まで、中の三つは普通ク
ラスとして、クラスに国立理系と
私立文系などの名前をつけて学
年を七クラスに分けた。

これが功を奏して、学校の成績
が上がり、東大にも入るようにな
り、この制度がその後定着した。
生徒の力が伸びてきた。後に教育
長になった古橋先生や教育次長に
なった遠藤先生など当時若い先生
を我が家に集めて、「土浦一高を
よくしようや。がんばろうや。」
と酒を持ち寄り、やろう、やろう
と盛り上げたものだ。

そうして、やる気のある先生が
増えていった。課外授業を充実さ
せ、テストの回数も増やし、やり
過ぎるほど生徒に勉強をさせた。
下妻や海道や竜ヶ崎の方からも
一高目指して入ってくる生徒が出
てきた。

—ところで、先生のあだ名は
「ナポレオン」ということですが、
どうしてついたのでしょうか？
【菅澤】私が土浦一高に赴任した
時に、ナポレオンの言葉を引用し
てこう言った。「ナポレオン曰く、
我に汝の国の青年を示せ。我、汝
の国の将来を卜せん。」このこと
から「ナポレオン」とあだ名され
るようになった。

ともかく、土浦一高の生徒に、
敗戦後の社会において「お前達青
年がしっかりしていれば、この国
はよくなる。お前達がやるんだ。

だからお前達を鍛えるぞ。日本の
国を復興させるのはお前達だ。」
ということを言いたかったんだ。
別のあだ名は「朝鮮トラ」。名前
が「虎彦」だから。(笑)

—当時の学校の環境はどうでし
たか？

【菅澤】私が赴任した昭和二十三
年頃かその少し前だと思うが、学
校の北側の新運動場に関して次の
ようなことが言われていた。「職
員が畑に使っている。学校の中を
畑にしておく必要はない。」こう
言って、当時の市の農地委員会が
校庭の一部を取り上げようとし
た。

これに対して、私は、当時水戸
にあった占領軍の軍政部に直接話
をしに行った。「カボチャや菜っ
葉を食っていかねればならないの
この時代に、運動もできないの
で、教員が仕方なく畑にしてい
る。それが取り上げられようとし
ている。そうならたらグラウンドは
無くなってしまふ。是非なんとか
してほしい。」と話をしたら、軍
政部はわかってくれた。その後入
江先生達のご協力もあり、校庭が
救われた、というようなことが
あった。しかし、その後私の知ら
ない内に政治家が絡んで、学校が
その所をある人に貸してしまふと
いうことが起こった。その後、長
島校長になってから本来なら自分
の土地なのに金を払ってやつと買
い戻した、というようなことが
あった。

—先生は一高に来るまではどん
な学校で教えられたのですか？

【菅澤】昭和二十三年の春としか
と、私の生まれは大正三年十月だ
から、三十三歳の時だが、旧制下
妻中学校から新制高校になったば
かりの土浦一高に着任した。
私は昭和七年に東京高等師範学
校に入学生し、十一年に卒業した。
直ぐに朝鮮の仁川中学校へ赴任

し、十六年までいた。職員会議で
も若いのに言いたいことをずばず
ば言っていた。ある事件のことで
私が容赦ない反対発言をした時、
校長からてっきり怒られるかと
思っていたが、後で「私の言いた
いことをよく言ってくれた。」と
逆に感謝されたことがあった。そ
の後京城中学校へ移り、昭和二十
三年三月に軍隊に召集されるまで
いた。戦後は、二十一年の四月から
旧制下妻中学校で教鞭をとってい
た。そして二十三年に土浦一高に
赴任したわけだ。

—先生は土浦一高でどのような
校務を務めてこられたのですか？

【菅澤】昭和二十三年に赴任し
、二十四年から三年間学年主任をし
たが、私が学年主任になることに
ある新校長から反対があり、私は
教育委員長へ直談判したことが
あった。三十七歳で教務主任にな
り八年間務めた。その後五年間教
頭をやり、いろいろあつて、大子
二高へ校長で転任した。大子二高
に三年間いて、その後海道一高
の校長を七年間務めて、定年と
なった。

—先生はどんなことをモットー
にしていますか？

【菅澤】私の処世訓は「言いたい
事を言い、やりたいことをやり、
楽しく生きる。人に憎まれても恨
まれても気にせず、人を憎まず、
人を恨まず、楽しく生きる。苦し
くても悲しくても、楽しく生き
る。」ということだ。先程述べた、
仁川中学校での件が言いたい事を
言ったはじめての経験だった。それ
からは、いろいろな所で言いたい
ことを言ってきた。「言いたい事
を言う」とは「正しいこと、筋の
通ったことであっても上司に言え
ないようなことがあるが、そうい
う事を皆に代わって言う、それも
自らの信念に基づいてものを言
う」ということだ。

また、教頭だった頃、学校の人
事のことであるいろいろな学校外から圧
力があつたが、撥ね退けたことも
あつた。校長先生に任されて人事
を行っていた時、外部から「教頭
の身分で人事をするとは何事だ。」
などと言われたが一切妥協するこ
とはなかった。きちんと筋の通つ
たことを言い続けた。校長になつ
ても私のモットーは変わらない。校
長の時も、いろいろ外圧があつた
が、言いたいことは言って、一歩
も引かなかった。自分の信念に基
づいて言いたいことを言っている
と、敵はあまり多くなるものだ。

—先生の趣味は何ですか？

【菅澤】今は囲碁だ。月に八回く
らい出かけてやっている。あと
庭の草取りかテレビを見ているく
らいだ。小学生の時に母親から将
棋を教わり、出島の農夫だった父
親から囲碁を教わった。出島と言
えば、歩崎で泳ぎ、その観音様
の境内でよく遊んだものだった。
私は中学当時、数学が一番でき
ると思っていた。高等師範時代に
は、将来学者になろうと思ってい
た。高等師範の学生の時、まだ習
わない分野で私には三時間かけて
もできない問題をスッと解いてし
まうヤツがいた。その時学者にな
ることは諦めた。それから落第
しない程度に勉強して、本をむさ
ぼり読んだ。歴史、哲学、文学の
本を読みあさった。歴史は古代史
から全部読んだ。日本史、世界
史、中国史など全て読んだ。こう
いうことが趣味といえ趣味だつ
たが、これらの素養が後々生徒の
ためになったと思う。
—先生、今日は本当にありがと
うございました。これからも元氣
でお過ごしください。

卒業生レポート

⑧

持続可能な社会への転換

日本電気株式会社環境推進部長

久保田忠夫

高十七回(昭和四十年卒)



が、豊かさの実感はほとんどありません。むしろ、社会は荒んできていると言え、特に子供たちにまで異常な犯罪が広がっているのはある種の警鐘と言えます。

一方、今や人類にとって最大の課題である地球環境問題は改善されるどころか年々深刻さを増しています。地球温暖化、環境ホルモン等の有害化学物質、廃棄物、資源枯渇等々の問題は近年では頻繁にマスメディアにも取り上げられ、事態の深刻な状況の認識は広がっていますが、その根本原因が問われることはほとんどありません。

現代社会は科学技術の進歩をデコに自由競争の下、経済的豊かさを最大の目標に追求しています。その結果、戦後五十年間で世界経済は六兆ドルから四十三兆ドルへと飛躍的に拡大し、さらなる成長を競い合っています。なかでも経済の優等生だった日本はバブル崩壊後の停滞の十年を経て今やデフレのトンネルを抜けようとして必至に喘いでいます。マスコミの政府や経済動向の報道に一喜一憂しつつ、展望もなく国全体が元気をなくしています。

この辺で、私たちが最大の目標として突き進んでいる経済の成長拡大とは本質的に何なのか、人々の幸せにどれだけの影響を及ぼしているのかを考えてみたいと思います。一九八〇年の日本のGDPは二百四十七兆円と今の半分でした。つまり、この二十年余りで日本の経済規模は二倍になっているのですが、実感として豊かになっているのでしょうか。率直なところ、物質的なレベルでは車、インターネット、携帯電話等はめざましく普及しています

ものが根底から見直されねばならないのです。

これまで経済のあり方そのものが問われることはほとんどありません。今なお、政府もデフレを克服し景気を回復することが最大の課題であり、社会全体もお金を中心として、企業間の競争は生き残りを賭けて激しくなるばかりです。人の命に関わる医療業界も、一人一人の個性を伸ばすべき教育界も、生きる道を論ずべき宗教などはほとんど全ての分野がお金や経済的価値に呪縛されている状況と言えます。そろそろ私たちは目覚めて価値観を大きく変え、社会システムも根底から変えていかないと人類自体も持続できないのではないのでしょうか。

かく言う筆者も一九七〇年に企業人となって以来、二十年間は全く迷うことなくひたすら自社の業績向上に企業戦士の一人として販売部門の先頭に走ってきましたが、一九九〇年に転機が訪れました。仕事上で理想(TM)と経営コンサルタントの船井幸雄氏との出会いから、宇宙観、見えない世界、環境問題等々を追求していく中で価値観がまるで変わってしまいました。その結果、ゴルフや肉食を止めて生活スタイルが大きく変わり、ついには仕事まで(一九九五年に環境部門へ自発的異動)変えてもらいました。以来、仕事として環境問題を追求すると共に、週末は三百坪の山間の畑で自然農を楽しむ日々です。これらを通じて、現代社会の大きな矛盾に比べ、自然界の大地、水、空気、光の生命維持システムにより全ての命を生み育んでいる余りにも見事な仕組みに気づき、これからの生き方や社会の方向転換の必要性を講演等さまざまな機会で情報発信をしています。

私たちは皆、豊かに幸せになりたいとそれぞれの分野で懸命に努力していますが、今のようないく市場経済の延長で経済をいくら拡大しても人類が幸福になることもなく、むしろ資源や環境問題がさらに悪化して破局に近づいて

ではないでしょうか。富の象徴としてお金をどんなに蓄積しても、お金は社会的信用(虚の価値)に過ぎず、世界的な食糧危機や天災が訪れたら、ほとんど役に立ちません。経済・お金という呪縛から解放され、本当に大切なものは何なのかから問い、これまでの価値観を見直すことです。

人類は他の生命と同様に自然界の摂理に則り、大地、水、空気、光の生命維持システムを共有して生かされており、本質では全てが繋がった一体の存在であり、争いや過度の競争も意味がありません。めざす社会は経済の成長拡大や個人個人の幸せに照準をおくのではなく、地球上のすべての人が安心して、健康で、文化的に、楽しく暮らせる真の持続可能な社会ではないでしょうか。

そうは言っても、六十億の人類皆が豊かに幸福になるのはとうてい無理と思われる方が大多数かも知れません。しかし、世界中が目覚め必要以上に資源やエネルギーを浪費しなければ今の半分以下でも実物経済はまわるのです。その規模なら石化エネルギーや制御しきれない原子力に頼らなくても風力、ソーラー、バイオマス、燃料電池等の再生可能な自然エネルギーでほとんど賄えるレベルに技術も近づいているのです。食糧も資源効率の悪い肉食を最小限に抑え、飼料用の穀物を分配すれば飢える人はほとんどいなくなるでしょう。病気も予防医学、食事療法(医食同源)、気功、各種サプリメント等の活用により大半が克服できるように近づいてきます。

経済の本質はお金ではなく、人々の協働、知恵と技術、および自然の資源さえあれば地域社会なりに必要なものは全てがつくれ、賄え、実質経済はまるまるです。したがって、人々が目覚めて信頼の絆が強くなればお金はほとんど不要な社会が実現できます。このように価値観を変えることにより素晴らしい社会が実現できると思われる

人類は本質では繋がった一本の存在

です。百匹目のサル現象ではありませんが5%なり、10%の人々の意識が変わったら種全体に伝播すると言われています。今の日本の社会に最も欠けているのは明るい将来のビジョンです。これからは経済の成長拡大をめざすのではなく、人類全体が安心して、健康で、文化的に、楽しく暮らせる真に持続可能な社会を共通の目標に、どうしたらそのような社会が実現できるか、ひとり一人の叡知を結集しようではありませんか。

【略歴】

昭和22年 茨城県に生まれる
45年 京都大学経済学部卒業後、NEC入社

以来、通信機器のマーケティング、OA製品の販売促進、大手建設業界へのセールス等を経験

62年 東京支社販売促進部長
平成2年 国内販売推進部長代理

(この間、新しい価値観、健康法、環境問題を追求)

7年 環境管理部環境ビジネス統括部長
(環境部門へ社内トラバース)

12年 環境推進部長

【対外的活動】
・NPO法人公共政策センター理事
・水と食の健康法クラブ理事

【自然農の実践】
平成9年から、神奈川県最北部の藤野町の山間に三百坪の畑を借り、週末は自然農を営みつつ、余りにも行きすぎた現代物質文明に対し、自然からのメッセージとライフスタイルの転換に向けて情報を発信。

【著作物】
・講演録、小冊子
・世の中の変化と企業人の生き方
・ビジネスマンの健康管理
・ガイアメッセージ
・ガイア経済革命
・ガイアライフスタイルのススメ他

支部だより

進修同窓会美野里支部 創部二十周年を迎える！

「光陰矢の如し」近年は、時が飛ぶように速く流れていく様に感じます。私共の進修同窓会美野里支部は昭和五十九年三月、町内の「みのり荘」で設立の産声を上げて以来二十一年の歴史を刻み、今年に記念すべき二十周年の節目を迎えることができました。この二十一年間を振り返りますと、「会勢の拡充」と「活動の活性化」等について、多くの困難や問題点がありました。これらをどうにか乗り越え、派手さのない地味な活動ながらも、細く長く継続して現在に至ることができました。これも偏に、創部を陣頭指揮した初代支部長の木名瀬博氏（故人・旧中四十一回卒）の並々ならぬ御尽力による支部の組織基盤が確立されていたこと、そのご人徳、卓越した統率指導力があつたからであり、加えて、その時折の役員はじめ諸先輩と、各位のご協力の賜と深く感謝しております。因みに、前述の細く長く継続した事業等は次の通りです。一、支部総会の開催（二十回）、二、研修バス旅行（八回）、三、懇親会、新年会、忘年会（十一回）、四、会報の発行（第一号、第二号）、五、記念誌の発行（創刊号、五周年号、十周年号、二十周年号）、六、本校百周年記念事業等への支援。本年度の支部総会は、二十周年の記念の事業にふさわしくするため、従来の「駆け足総会」から趣向を変えて「泊温泉旅行を兼ねた「ゆつたり総会」とし、去る六月中旬に塩原温泉で行い

ました。また、このような総会には、通常本部の会長、本校校長等をご招待するのが恒例でしたが、今回はこれを改め、故人となられた木名瀬初代支部長の御霊に支部の今現在の有様をご報告するとともに、在りし日の面影とその遺徳を偲ぶ総会とするため、また、できれば町村合併等の町政等について懇談するため、ご子息の町会議員木名瀬幸吉様をご招待して開催しました。総会恒例の議事に引き続き懇親の宴に入ると、参加者はそれぞれ年代を超えて支部二十一年の歴史を共有する者同士として、時間を忘れての懐古談に花を咲かせ盃を重ねる者も幾たびか、思い思いに座を変わり懇親を深め、これからもお互いに元気で仲良く楽しく歳を重ねて、また共に「三十周年を迎えたいね」と節くれた手を握り合い、涙だらけの目と目を合わせ、微笑みを交わしあいながら創部二十周年を迎えたことに對して心から慶びを分かち合いました。この二十年を振り返りますと、前述の様に着実に歩みを続けてまいりましたが、ここ数年は、行事等への参加者の減少、活動のマンネリ化と停滞等、いろいろな意味で曲がり角に来ているのではないかという気がしています。しかし、このような曲がり角もみんな知恵を出し合えば必ず道は開けてくると思っております。「駄目だ、できない」という言葉を発する前に、皆で知恵を絞ってこの転機を乗り切り、これから先、更に一歩でも二歩でも前進したいと思っております。これを達成するには、執行部と会員皆さんの風通しをよくして、「同窓会に入っていれば、そしてその活動に参加すれば人生のひと時を

共に過ごした土浦一高という学舎での共通の思い出を語り合える心の豊かさと同窓会の良さが実感できる」という「元氣と魅力のあるすばらしい同窓会」になるよう皆で頑張っていかなければならないと思っております。また、当支部は、同窓会活動を通じて地域活動への参加を目指して行くことを少しずつ取り入れて、この美野里町に在って地域の皆さんに信頼され、期待される同窓会であり続けたいと考えております。

（支部長 中村達（併中一回）記）

高津天川支部

高津天川支部の平成十五年年度の総会は、去る五月十一日、ホテルCANOKOに於いて開催され、同窓会本部横田尚義副会長、土浦一高山田隆士校長のご臨席を得、横田副会長より本部同窓会の近況報告、山田校長よりは、母校案内のパンフレット、大学合格者数一覧表の配布と説明があり、支部活動に元氣を与えて頂きました。尚総会に於ける提案議題については、出席会員の慎重審議の結果承認可決されました。当支部の現在会員数は三十七名で構成されております。支部事業は、前宮本西副支部長、現狩谷論支部長と一貫して支部活動三本柱を基本に実施しております。

第一の柱は会員相互の親睦を図る為、「進修高津天川」の会誌の発行であります。毎年五十余名の会員に、筆題自由にて原稿の寄稿依頼をお願いして作成しています。前年度（二十四号）も同窓会本部会長 樋谷祐一様より、「国家の健康」と題する寄稿



稿を頂き、会員全員が深く感謝しております。又二十五名の会員の方々からも寄稿頂き、充実した会誌が完成されました。会誌こそ会員相互の「心をつなぐ広場」として大切なものであり、事業活動の大黒柱であります。又、会誌発行の為四十件の広告協賛者には、改めて深く、感謝申し上げます。本年も会誌二十五号の発行に編集委員は、鋭意準備に入っています。第二の柱は、ファミリーバスハイイクの実施であります。年一回、秋の旅行シーズン中に、一日のバスハイイクを実施して来ている。昨年は、句を楽しまい幸に舌鼓をうつ横浜散策をタイトルに、千葉県、富津公園散策、東京湾アクアライン経由にて、横浜中華街を三六名の会員家族共々にて、楽しんで来ました。本年は二十回目の実施となるので、企画委員は、句を最高に楽しめる旅を準備中です。第三の柱は、春秋のゴルフコンペの実施です。本年も春のゴルフコンペを、去る四月十六日、石岡市セコピアカントリークラブにて会員十六名の参加にて実施致しました。

以上が当支部の活動状況です。（副支部長 鎌倉直 記）

竜ヶ崎支部

当支部は代々の支部長や先輩達の努力により間隙はあつたものの約四十年になる。当時二十才代の美青年も已に還暦もすぎ、会合では不意ながら上座に据えられ、二十数名で発足した会員数も二〇〇二年度版の名簿によると四百名を超える状況となっている。世界や世の中の動向を注視しているうちに、時の推移を痛感する昨今である。平成十四年度の支部総会は、一月二十五日（土）午後五時より竜ヶ崎一高下のブライダル下平で開催し、開会の言葉、支部長挨拶に始まり、来賓の同窓会副会長の太田根先生から本部の

活動状況、あるいは各支部、総会等についてお話をいただき、更に母校の大山教頭先生から生徒達の生活状況、校外活動、部活、そして進学の現況の説明があり、特に東大の合格者が全国で上位となり、他の有名大学にも合格者が多くなったため各地の関係者が教育の実態の視察に来校しているとうかがった。私共はこのような実状に誇りを感じ、その永続を願うと共に後輩達の築いた名声を地に落とさぬよう、卒業生であるとの自覚をもって世界的に視野を広げながら地域社会に貢献せねば等の話に発展した。ついで議事、懇親へと進み、自己紹介の後、会員相互の情報交換、自慢の喉の披露等々で、明日への活力の基盤となるエネルギーを愉しく充分に醸成し、最後に四百名を超える会員にいかんにか支部活動に参加してもらえぬかを検討し、貴重な意見の集積をみて、今後、徐々にそれらを実践して行く事とし、和気あいあいのうちに校歌斉唱、次回の再会を約して閉会となった。又、八月三十一日に竜ヶ崎一高下の弥助寿司で支部有志会を開き、総会に劣らぬ盛況を見た。竜ヶ崎支部は、今後とも支部会員の相互理解や活力源となり得るならばと柔軟性をもって活動を継続して行きたいと思っております。

支部役員

顧問 間 岩田伸之輔（高二）
支部長 齋藤 和夫（高三）
副支部長 高野 史雄（高七）
事務局 助川 博夫（高二）
計 足立 仁一（高二九）
（支部長 齋藤和夫 記）

八郷支部（八郷進修会）

八郷進修会は、土浦一高・旧土浦中学出身者で八郷に住んでいる者をもって、昭和三十年に先輩のご尽力により相互の親睦を図ることを目的として組織され、会員は地域社会の中で中堅的な立場で活動を展開している年齢等を

（8面に続く）

(7面からの続き)

考慮して、現在は高校三十二回卒業生までとし、百三十一名を擁しています。会の組織は、会長、副会長、常任理事および幹事若干名で運営し、毎年八月に総会を招集しています。平成十五年度の総会は、八月二十三日(土)午後二時から国民宿舎「つくばね」を会場として三十名の参加を得、山田校長、阿須間教頭のご臨席をいただき開催しました。総会に入る前に、会場玄関前で記念撮影をすることが恒例になり、会員の家族の御協力をいただき直ちに現像・キャビネ版に引き延ばしを繰り返して、総会終了時にはそれぞれお持ち帰りできる運びになっています。一同が席に着いたところで、一、物故会員に対する黙祷、二、開会の言葉、三、会長挨拶と続き、四、米寿を迎えられた旧中第三十三回卒の大和田正典氏(東成井在住)と、平成十四年度の叙勲で、船の仕事に携わること約五十年で社会に大きく貢献した功績で勲五等双光旭日章の榮譽に輝いた高第一回卒の比企光雄氏(小端在住・現八郷進修会会長)に記念品を贈呈し、謝辞をいただいたあと、五、平成十四年度会計報告があり原案どおり承認され、六、会長・副会長の任期満了に伴う役員改選では現役員の留任が決まり、七、来賓挨拶として、山田校長から一高の現状と将来の展望を、また、会員でもある関野和夫町長(高第二回卒)からは市町村合併問題の経過・町政の現状について、それぞれ貴重なお話をいただくことができ、八、閉会の言葉で総会が終了し、引き続き懇親会に入り、旧中第三十八回卒の小河原四郎氏(瓦谷在住・現八郷進修会顧問)の乾杯の発声により、大吟醸の心地よい酔いの進むにつれ、座は盛り上がり、高第三回卒の関肇氏(細谷在住・現八郷進修会常任幹事)の音頭で一高校歌を斉唱し、旧中第四十二回卒の大塚誠氏(柿岡在住)の万歳三唱でお互いの健康を慶び再会を約し幕を閉じました。

(副会長 佐藤芳夫 記)

お知らせ お便り

卒業四十周年を迎えて

私達第十五回卒業生は、去る四月十三日(日)に、卒業四十周年記念の祝賀として、進修同窓会総会にお招き頂きました。真新しい体育館で、今年、母校の校長になった同級生山田隆士さんの挨拶を聞きながら、素敵に年を重ねた男の方達の姿を、私はまぶしく見つめていました。在学中は、男子の方が幼く感じられたのですが……。

式典の後、十六時より霞ヶ浦観光ホテルで「学年会」を開催しました。一年半前に、同級生の小幡政人さんの「国土交通省事務次官就任のお祝い」を開催したばかりでしたが、出席者一〇一名は再会を喜び合っていました。

十五回卒の自慢は、九十一才になられる学年主任の稲見敏雄先生をはじめ、三年の担任の先生方が全員お元気なことです。そして全員が今回の学年会に出席して下さいました。A須田直之先生、B雨谷昭生先生、C川村安宏先生、D久保隆司先生、E鶴巻勝夫先生、F横田尚義先生、G矢口四郎先生、それから、二年C組担任の池井芳寛先生もご出席下さいました。特に矢口先生は、ご自身が卒業六十周年を迎えられ、母校で共に祝いを受け、「霞月楼」で学年会を楽しんでいらしたのを見て、先生方には感謝の気持ちでいっぱいでした。



稲見先生のご挨拶の後、矢口先生の乾杯の音頭で宴会が始まり、他の先生方にもマイクで一言ずつお話を伺う予定でしたが、余りにも皆が熱中しているの

で、先生方のご要望で中止になりました。これほど話が盛り上がったのは、記念品「Next Horizon」のおかげでしょうか？

学年幹事会で四十周年の記念品作成を考えたのは五年前、具体的な活動半年間で、私達は「卒業四十周年記念誌(Next Horizon)」を作りました。記念誌の原稿は、一人一頁という枠だけ決めて、原稿をそのまま載せるという方法をとってみました。写真やイラストが沢山あり、手書きの文章や個性のある原稿は、見るだけでも楽しいし、読みやすく仕上がりました。内容も充実していると思います。

原稿集めにはとても気を使いました。寄稿を自由に、強制しなくなかったからです。「一三七名(内恩師十名)の原稿が集まった時には、残り時間が少なくなりました。『編集作業』と『年譜作り』は寝不足の戦いになりました。各方面で華やかに活躍している幹事さん達や、表紙イラストを描いて下さった松浦英二さん、制作を担当して下さいた小田木秀一さん等、十五回卒業生の、多彩な人材がフル活動し、素晴らしい記念誌が、無事に完成致しました。ありがとう！そして本当に疲れました。

(第十五回卒同窓会 代表幹事 野村ルナ)

卒業二十五周年の校歌

「沃野」「望数百里」最近ではほとんどありませんが、若い頃はよく一高同級生の結婚式だといふタミ声を取り上げて歌われていました。在学中は愛校心の欠片も無かったように思いますが、卒業後は何故か校歌が好きになり、高校野球地区予選で母校の応援に行ったときなど、スタンドの在校生と一緒に小さな声で歌っておりました。歳月の経過とともに、私の心の中で、母校というものの存在

はその姿を変えていき、今回、かつての同級生とともに校歌を歌うべく、及ばずながら同窓会の幹事を引き受けた次第でした。

まだ桜の花の残る四月十二日、ホテルロイヤルレイク土浦での卒業二十五周年記念同窓会には、恩師平田増三先生はじめ百三十余名の出席を頂き、盛大に開催できましたことを大変ありがたく思っております。母校の進学実績が向上するにつれて自分との隔たれを感じていたところですが、忘れていた当時の愚行を思い起こさせる懐かしい顔や声に接するたびに、自分も土浦一高の卒業生なんだと改めて実感いたしました。中には思わず声を失う体型や風貌になってしまった人もおりましたが、そんな同窓生達と飲食も忘れて近況報告、思い出話に声を暖らし、最後に歌った恒例の校歌はとても心地よいものでした。

翌日、本校新体育館での進修同窓会総会及び祝賀式、引き続きホテルCAN KOHでの祝賀会と出席させて頂いたのですが、この日は驚きや感動の連続でした。日本館に響きわたった弦楽部員のバイオリン演奏は、過ぎ去った歳月を呼び起こしてくれました。在校生がデザインし、未来を夢を表現したという新体育館の緞帳は、これまで見たことのない斬新さで、母校の現在を伝えてくれました。祝賀式での現役応援指導員による校歌や応援歌は少しも変わっていません、これだけのために来年度の総会も出席したいと思うほどでした。そして、祝賀会場のホテルCAN KOHに用意された旧本館がえがかれた屏風に、校歌が記されてあり、一日中、心ゆくまで母校の思い出を堪能することができました。



最後に、この場をお借りして、卒業二十五周年を迎えた私共に、祝賀式において温かい御祝辞や記念品を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。さらに、次回同窓会では、またたくさんの同窓生とお逢いできること、そして、今夏地区予選で大活躍を見せた母校野球部の甲子園出場を、共に喜び合う時が来ることを願っております。

(文責 安達(中村) 哲也)

第一級の文化財「旧本館」

二年目に入った旧本館活用委員会、学校・同窓会の御協力をいただきながら、毎月定期的な活動と旧本館の一般公開を欠かさず実施しています。昨年度来、資料展示室など施設面での整備が進み、資料館としてある程度体裁が整ってまいりました。

また、一般公開も校内委員によるマスコミへの働きかけやホームページでの紹介などによって確実に来館者を増やしています。最近文化財としての旧本館の存在は他県まで知られるようになり、県外からの見学者も多くなってきました。研修会や同好会などの団体が主ですが、首都圏のある旅行社企画による、陸前浜街道をバスと徒歩で巡る史跡探訪ツアーに、本校旧本館がケースなども出てきています。



同じように文化財校舎を有する学校などからの視察も多く、いずれも文化財を愛護しながら有効に活用していく方を模索しています。本委員会でも、他県の実情を覗くため八月に同窓会本部役員の方々に参加して八月に同窓会本部役員と栃木高校の文化財校舎を視察してきました。課題や利用状況などそれぞれ異なりましたが大変参考になりました。そして改めて本校旧本館が第一級の文化財である感を強めました。

(旧本館活用委員会 飯村弘)

母校だより

―第五十六回一高祭― 「華」

一高祭実行委員長 藤井 彰夫

第五十六回一高祭が五月の三十、三十一、六月一日と二日半にわたり開催されました。今年は一高祭を「百華繚乱」として一高祭実行委員会一同、昨年九月から地道に準備を積み重ねてきました。今となつては「最高の一高祭だった」という達成感にあふれていました。しかし振り返ってみれば、準備の過程でいろいろなことがありました。これまでの一高祭で育まれてきた伝統を引き継ぎながら、さらなる進化を求め、一人一人の「華」を開華させるということは、誇りであると同時に大きなプレッシャーともなります。より良い企画作りのために一つ一つの企画についてじっくりと話し合い、時には意見をぶつけ合いながら納得のいく結論を求めていきました。また、週休二日制のため一高祭の日程を調整するのが難しかったり、校内装飾とテーマのかかわりを根本から考えていったり等と、大変でしたがやりがいがありました。このようにゆくりではあるけれども着実に準備を進めていた過程で生徒たちの「華」が成長し、一高祭当日にはその「華」を開華させることができました。



素晴らしいものを創り上げてくれることを、高祭の更なる発展を心より祈っております。

ARRE(クラス劇)や知的好奇心を刺激するイベント大会、今回は雨が降ってしまったため、最初で最後の試みとして旧体育館でも行いました。アリーナでのこの自慢は好評のうちに終わりました。また一高祭の顔であるゲートは装飾が細部まで丁寧に施された西洋建築物が造られ、来校者の賛美を浴びていました。そして、これから一高祭の名物になっていくだろう一高ドラヤキも販売開始から二時間程度で完売してしまふほど爆発的人気をみせました。このほかにも委員会やクラスでたくさんの方の企画が行われ、充実した一高祭となりました。

このように第五十六回一高祭は一高生一人一人が「華」を開華させ、それが集まることでさらに大きな「華」を生み出すという素晴らしいものになりました。そして一高祭が大成を収めることができましたのも、ひとえに私たちの活動を見守ってくださった諸先生方、保護者の方々のおかげです。全校生徒を代表してこの場をお借りしてお礼申し上げます。さて、次の一高祭ですが、後輩たちは、すでに動き出しています。

―第二十六回一高オリンピック―

一高オリンピック実行委員長 戸枝 義博



で活動してくれた実行委員の表紙に躍動感あふれる絵を描いてくれた人達に感謝したいと思います。

九月十二日、一高の秋の祭典、一高オリンピックが行われ、各種目でそれぞれの名場面が生まれて大成功をおさめました。思えば七月、第一回の実行委員会、ひよんなことから自分が実行委員長となつてしまい、不安もありましたが、成功させるためにその日から多忙な日々がはじまりました。今年「二人最低一種」これを目標として委員会を進めて行きました。そのためにまずはアンケートを中心として、種目を決めていき、次に過去の資料を参考にルールを統一し明確にしました。そして各種目の競技時間が極力重なることのないように何回も確認、調節をしてタイムテーブルを設定しました。今年三年生の理系と文系のクラスの間の女子の人数が大きく違うので、三年F、G、H組の人数の選択種目を限定してしまつたり、しおりを全員にくばれなかったりなど多少我慢してもらわねばならないこともありました。しかし、当日はほぼ予定通り順調に進行し、大きな事故などもなかったの自分としてはとても満足しています。

―第三十五回歩く会―

2年B組 野口 光裕



この大成功は、自主性のある一高の生徒のおかげでしょう。実行委員はもちろん、一般生徒の方も当日のゴミ拾いしてくれたり、この会を通じて一高生

あれはいまからだいたい半年程前、今年で三十五回目をむかえた一高の三大行事の一つ「歩く会」の実行委員会は結成されました。今となつては「あつ」という間に感じられたこの半年間の出来事も、当時は永遠に続く終りのない道に見えていました。歩く会をやる上で一番の大きな問題となるのは何といってもコース決定です。「道がない」。この言葉はコース決め段階で何度使ったか分かります。土浦周辺も近代化の波と共に交通量が増え、全校生徒の千人が安全に歩ける道は本当に少なくなつてしまいました。そんな中で何度も案を練った結果、八郷フラワーパークと千代田町と一高というコースに決まりました。天候にも恵まれた十月十日の当日、歩く会は始まりました。スタート地点までのバスでの移動、弓弦での山越え、数ヶ所ある横断箇所など、当日も不安なことは山積みでしたが、終ってみれば全てが順調に進み、一般生徒からとつたアンケートの結果も大変好評なもの、今回の歩く会は大成功に終わったのではないかと思います。

福祉ボランティアをして

一年B組 大澤 重仁

私たちはボランティア活動として老人ホーム「かがやきの郷」を訪ねました。「かがやきの郷」の職員の方々と話し合いによりクラスを四つのグループに分けて行くことにしました。

主にゲームなどをしながら老人の方とコミュニケーションを図ることや、音楽療法という「かがやきの郷」で週に一度行われていることの体験、また、音楽発表として合唱や、弦楽二重奏をしました。一高出身の方も多く、昔の一高の話、昔の土浦の話、戦争中の話などもしてくれました。

時間はあつという間に過ぎ、帰る時間がくると、「よし、万歳三唱だ」とおんどをとってくださる方や、泣いて別れを惜しんでくださる方もいました。来てよかったな、また来ようという気持ちになりました。

老人ホームを利用している方は、生活面からは介護により、健康でとても楽しい生活を送られていることと思います。しかし、自分の家庭のように、自分の悩み、うれしかったこと、そして悲しかったことを打ち解けては話せない人が多いのではないのでしょうか。そのような面において、老人を支えていくことが、老人福祉のボランティアにおいて、大切なことではないのかなと、今回の体験により、感じました。

職員室だより

国語科

国語科は現在九名の職員で構成されています。今年度の一学年担当は清水智恵、石川格、増田誠也(今春伊奈高より赴任)。二学年は門井了、山田修(高22)、大塚奈美子(高30)。三学年は成島義己(進路指導部長・高20)、関勝一(高38)、奈良由紀子で担当しています。

職員室は三階と四階に分かれ、生徒の教室に最も近い位置にあるため、進路の事や思春期の様々な悩みを抱えた生徒が、いつでも気軽に入ってこられるよう、明るく和やかな雰囲気心をかけています。

通常は学年体制で持ち上がるので、生徒が大きく成長してゆく三年間を見守ることが出来ます。さらに教科の性格上、人としての生き方や考え、感じ方を生徒と共に学び合えるのが醍醐味です。生徒に「大人になるって楽しそう!」と感じてもらえる事が、いつの時代においても最も大切な教育であると考えます。

今年の一高祭のテーマは「百華繚乱」でした。世界でたった一つの花である自分が、幸福な生き方を見つけ自分らしく咲きほこれるよう、先に生まれた人間として何か道標を示せればと思います。そんな願いを胸に、私達は花鳥風月、山紫水明の自然を愛する心を持ち、週末には晴耕雨読、時に沈思黙考、奇想天外の柔らかなさあり、暗中模索で無我夢中の日々も乗り越えながら、九人九色の和を大切に日々過ごしています。

家庭科

全日制家庭科では、十四年度末の人事異動で、渉外部副部長をされていた宮本昌子先生が定年退職されましたので、今年度は、土浦二高から勝田美智子先生に応援にきていただいております。勝田先生には、週二回(水・金)二年生の生活一般を担当していただき、一年生の家庭基礎は、平塚園子が担当しております。また、定時制家庭科も土浦二高から、助川敬子先生が二年生・菅谷かつ江先生が三年生の担当ということでお出でいただき、二高の新風と明るい雰囲気の中、毎日楽しくしかも充実した日々を送っております。

家庭科の授業は、学習の一部に家庭クラブの活動があり、ホームプロジェクトの研究にも力を入れております。

今年度は、年三回の校舎外清掃や各種講習会などの活動に取り組んでおります。特に、テーパーマナー講習会や料理講習会は、生徒にも大変人気があります。

去る、十月三日(金)中間考査終了後にテーパーマナー講習会がサレイク土浦で行われ、一年生二十一名・二年生五名が参加し、緊張の中楽しいひとときを過ごすことができました。

現在、家庭クラブの役員を中心に各クラスの家庭科委員とともに新しい企画や講習会のテーマの検討など張り切って活動中です。

部活動だより

軟式野球部

二年 吉松 聡

僕達軟式野球部は、今年の春から一、二年生共九人、マネージャー二人の計二十人で、チームの「和」を大切にしながら、限られた時間と場所とお金の中で練習に励んでいます。

先日、秋季県大会が終了しました。結果は、準決勝で東洋大牛久高校に破れました。正直、勝てると思っていただけに、試合中では笑顔が絶やさなかったサインも、厳しい現実の前ではしばし無然とした面持ちでした。夏季県大会優勝という実績が、追われる身であるという重圧を僕達に、背負わせていることは、十分理解しているつもりでした。しかし、この時ばかりは、金属バットで殴られたように、この事実が僕の頭に強烈に叩き込まれました。

その一週間後の今に至っては、僕たちは追う身となつて練習を続けています。今から次の大会である春季大会まで半年以上も間があります。そのため、この悔しさをずっと晴らすことができず、心にくすぶり続け、精神的にきつい時期です。しかし、この半年間の猶予で、自分たちに欠けている能力や精神面を飛躍させなければなりません。

僕たち二年生にとって、次の大会が高校生活最後の大会になります。今から一人の部員も欠けることなく、万全な状態で春季県大会に臨み、優勝を目指します。今後とも応援よろしく願います。

バドミントン部

二年 村松 悠輝

私たちバドミントン部は、男子十七人、女子六人の計二十三人で活動しています。男女共、二大会連続で逃している、団体での県大会出場を目指して、日々練習に励んでいます。

バドミントンという競技は、部自体は多くの高校にあるものの、まだまだマイナーで、競技人口も多くありません。そんな中、二十三人という部員数は多い方で、仲間、そして競争相手に恵まれ、共に切磋琢磨しあえる環境にあります。また、部員の半数以上が高校から始めている為、中学校からのバドミントン経験者が、積極的に指導にあたっています。その活動が着実に実を結び始め、先に行われた県南大会では、シングルスB(出場資格が高校から始めた一年生)で準決勝に進出しました。

現在の悩みは、部員数の割に、コートが二面と少ないことです。コートが二面と少ないことで、効率的に練習と、練習量で補っていききたいと思っています。また、年に二度の合宿では、新井先生のご指導の下、夏は基礎トレーニング、春は実践を中心に、密度の濃い練習を行っています。蒸し暑い、閉め切ったアリーナの中で、夏合宿を終え、部員達も一回り大きくなったと思います。これから寒い季節になりますが、よりいっそう体力づくりに励み、また一日一日を大切にして練習していきたいと思っています。楽しめる部活が大前提ですが、大会結果、勝ち負けにこだわって日々精進していきます。

頑張る「高校生」

第38回全国高校(定通制)陸上競技大会出場

定時三年 桜井 忠男

去る八月、国立競技場で開催された全国陸上大会に出場いたしました。今年も本校から六名が出場し活躍いたしました。男子三段跳では、決勝進出の成果を上げ喜んでおります。

私は円盤投げに挑み、結果は予選落ち、全国レベルに及ばぬ実力の差であったと思います。ただ最高齢の選手と紹介され注目を浴びたようです。試合当日は台風10号の通過、風雨の中のゲームとなりとまどいました。ともあれこのように大舞台に立ち競技できたことをとてもうれしく思います。

私は62歳、競技歴は全くなし、運動は苦手としてきました。誘われるままに部活の練習に参加、初めて円盤にふれたものです。そして県大会出場二年目で全国出場を手に入れました。体力も技術もない私が、10〜20代の若人と伍して競う、きつい反面痛快でもありました。工夫と努力で少しづつ距離が伸びて練習が楽しいものになり、それが後輩諸君にも刺激になったようです。すでに明年に向けて秋季練習が始まり、熱をおびております。次も楽しみます。

私は明春卒業となりますが、ここで培った新しい事への挑戦、やり遂げるという経験、これを今後に活かしていくつもりです。

おわりに、私のような初心者をごまご導かれた顧問先生、先輩方、チームメイトに心からお礼申し上げます。

平成十五年入試報告

合格数九百に

進路指導部長 成島義己

平成十五年入試では、東大三十二名(新卒二十二名)が合格しました。東大合格数は五年連続で三十の台を維持し、全国公立高中第二位であります。また、京都大に四名(新卒一名)、一橋大五名(新卒四名)、東工大十二名(新卒七名)、東北大三十二名(新卒二十名)、筑波大四十四名(新卒三十二名)の合格を出し健闘しました。特に東北大の三十人台は本校初の快挙であり、本校の輝かしい実績に新たな一頁を加えるものとして賞賛に値します。筑波大も全国第一位の合格数です。その結果、新卒生の国立大学合格者はここ数年の壁であった百二十を超え、百二十三となりました。国立の合計では百二十九となりました。

私大の方では慶応大五十一名(新卒二十七名)、早稲田大九十九名(新卒五十七名)、上智大十九名(新卒十八名)、東京理科大百十三名(新卒四十六名)の合格者を出しました。特に早稲田大の数字が光ります。

私立大等を加えた合格者の総数は九百名(新卒四百四十一名)に達しました。かつては一千人の合格者を数えた年度もありますが、本校生の定数減や入試制度の変更などを考慮すると、近年では大変多い数であり、内容的にも充実していると言えます。

一方、五月一日現在での新卒生の進学者数は前年比四名増の百九十六名となっています。これまで

指摘されてきた難関大志向の傾向は今年も顕著で東大・京都大・一橋大・東北・東工・筑波大の受験数が全体の七割近くを占めているため、進学率はやはり、五十五%にとどまりました。難関国立大を第一志望として他は受験しないか、私立大併願をするが、早稲田・慶応・上智等の大学以外では合格しても進学しない、という構図が徹底してきていまして進学者数の増加が困難な状況になっています。

週五日制、五教科七科目問題、新教育課程実施、大学の独立行政法人への移行など入試環境も激動の時代を迎え、見通しの立ちにくい中、世は挙げて浪人回避へと動きつつあるわけですが、本校生は多数浪人の傾向が続きます。法医学系や理科系ばかりでなく、文科学系においても大学教育六年が標準化する中で、一年くらい浪人しても第一志望の国立大学へ入った方がよいという判断が根拠になっているようです。

昨年度卒生の方は百七十名のうち、百四十一名が進学しました。東大・京都大・東工大・一橋大・東北大・筑波大・早稲田大・慶応大および国立大医学部などへ多くの合格者が出ていて、雌伏一年の苦勞が偲ばれますが、すべてが第一志望を貫徹出来たわけではありません。むしろ、第二の策として主要私大を併願し、合格できた所に入学するという現実的な組み立てを実行している者が多くなっています。

本校生が志を高く保ち、果敢に難関大受験に挑戦し、合格していくのは大変喜ばしい限りですが、希望に見合う実力養成という厳しい試験がこれからも続くと言えます。

平成15年度入試合格状況

国公立大学

私立大学

大 学	合格者	新 卒
北海道大	4	3
東 北 大	32	20
茨 城 大	5	4
筑 波 大	44	32
千 葉 大	11	6
お茶の水大	3	3
東 京 大	32	22
東京外語大	1	1
東 工 大	12	7
一 橋 大	5	4
横 浜 国 大	8	3
名 古 屋 大	2	2
京 都 大	4	1
宇 都 宮 大	2	1
山 梨 大	1	0
埼 玉 大	3	3
電 気 通 信 大	1	0
群 馬 大	1	0
東京学芸大	4	2
金 沢 大	2	1

大 学	合格者	新 卒
宮 崎 医 大	2	0
佐 賀 大	1	0
信 州 大	1	0
大 阪 大	3	1
神 戸 大	1	1
九 州 大	3	1
東 京 芸 大	1	1
大阪外語大	1	1
東京農工大	2	1
広 島 大	1	0
国立大計	197	123
茨城県立医療	2	2
東京都立大	2	0
横浜市立大	2	2
名古屋市立大	1	1
公立大計	9	6
防 衛 大	4	2
防 衛 医 科	0	0
大学校等計	4	2
国立短大計	0	0
私立短大計	3	0

大 学	合格者	新 卒
青山学院大	16	6
学 習 院 大	8	5
慶 応 大	51	27
国際基督大	3	2
上 智 大	19	18
中 央 大	32	15
津 田 塾 大	10	8
東京女子大	13	6
東京理科大	113	46
日本女子大	14	8
明 治 大	46	18
立 教 大	38	22
早 稲 田 大	99	57
法 政 大	34	16
北 里 大	11	5
芝 浦 工 大	19	2
日 本 大	13	4
東京電機大	10	3
私立大計	687	310
合格者総計	900	441

進修同窓会会務分担 (平成15年度)

1. 本部

担当	本 部 役 員	学 校	主 な 業 務
総務	豊 嶋 川 木島 説田 小野(慶) 中 谷 中	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	青 山 小野(治) 石川 渡辺 柴沼 小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	横 田 木島 谷中 堀越 宇田川 宇田 鈴木(志) 鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会報の編集・発行
名簿	大曾根 梅澤 小網 柳沢 野村 草苺 小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	横 田 大曾根 大曾根 桜井 谷中 野村	教頭 校内幹事	事務局と相互連携
監事	平田 田嶋		本会会計の監査

2. 支部

支部会等に際して、本部に対し出席要請がある場合は、会長又は下記の副会長のうち1名が、校長(または代理)とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りでない。

豊嶋、横田、大曾根、青山、植木、幡谷(浩)、桜井、中川

3. 進修同窓会校内幹事

高25 宮川 茂(数学) 高30 池井 芳則(地歴) 高31 飯竹 修(化学)
高34 酒井 貴美(数学) 谷口 俊秀(事務室長) 江本 春美(主事)

平成14年度 進修同窓会決算書

収入額 一金 23,839,647円也
支出額 一金 15,902,011円也
差引残高 一金 7,937,636円也

【収入】

項 目	予算額	決算額	比較増減	備 考
1 繰 越 金	11,765,649	11,765,649	0	前年度繰越金
2 終 身 会 費	100,000	60,000	△40,000	2名
3 年 会 費	7,000,000	9,915,000	2,915,000	3,027名他
4 入 会 金	1,940,000	1,940,000	0	新会員全・定386名×5,000円、 推薦入会1名
5 寄 付 金	0	145,765	145,765	下記に記載
6 雑 収 入	1,351	13,233	11,882	絵葉書売上代65組、預金利息
合 計	20,807,000	23,839,647	3,032,647	
ご寄付者名 卒業25周年同窓生一同様、中32回卒業生一同様より				

単位：円

【支出】

項 目	予算額	決算額	残 額	備 考
1 総 会 補 助	700,000	657,805	42,195	資料、会場設営外
2 会 報 発 行 費	4,000,000	3,385,165	614,835	会報印刷代、送料
3 通 信 費	300,000	38,780	261,220	切手、はがき代
4 卒業記念品費	200,000	158,000	42,000	卒業証書用筒代
5 卒業60,50,40,25周年 記 念 品 費	400,000	400,000	0	卒業周年記念品積立
6 会 議 費	500,000	193,333	306,667	
7 支 部 連 絡 費	300,000	170,000	130,000	支部会補助
8 生 徒 奨 励 費	1,200,000	1,200,000	0	生徒会補助
9 別 途 積 立 金	6,000,000	6,000,000	0	積立会計へ
10 慶 弔 費	100,000	25,500	74,500	葬儀花代、盛竜代
11 事 務 局 費	1,000,000	710,137	289,863	サラト事務処理費、進修記念 館用スリッパ代他
12 旧本館活用事業費	2,967,000	2,963,291	3,709	展示ケース、パソコン等代
13 予 備 費	3,140,000	0	3,140,000	
合 計	20,807,000	15,902,011	4,904,989	

上記のとおり決算しました。

※項目間の流用を認める。

平成15年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長 幡谷 祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成15年3月31日

監事 平田 公敏 印

監事 田嶋 栄吉 印

平成十六年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日 平成十六年四月十一日(日) 午後一時
二、会場 土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年 中四十三回
卒業五十周年 高六回 定四回
卒業四十周年 高十六回 定十四回
卒業二十五周年 高三十一回 定二十九回

一般会員・周年記念会員の数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会(懇親会)を開催いたします。

旧本館活用委員会から
資料提供のお願い

現在本委員会では、来年に校舎竣工百周年を迎えるにあたり、様々な準備を進めております。また、今後さらなる資料展示の充実をめざして、資料収集にもあたっております。つきましては、会員各位のお手持ちの資料提供を随時受け付けておりますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

会費納入の
ご協力とお願い

平成十四年度の会費納入状況は、三月末現在、三、〇二九名の皆様から、九七五、〇〇〇円を頂きました。今年度も納入して頂きたく、振替用

土浦一高ホームページ
アドレス
<http://www.tsuchiura-t-h.ed.jp>

編集後記

紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

先日、高校十八回卒の飯塚哲哉氏の文化講演会が開催されました。氏は、現在日本半導体ベンチャー協会会長として新しいベンチャーの起業の支援等、活躍されており、その講演の中で全校生徒に向けて、「自己実現をはかれ」というメッセージを送っていただきました。講演会終了後も、活発な質疑応答があり大変有意義なひとときを過ごしました。そのとき、ふと脳裏をかすめたものは、氏のように日本、いや世界中で活躍されておられる本校の卒業生の方々のことでした。日頃、学習や部活動に励んでいる在校生にとつては、身近な存在というわけにはいきませんが、心の奥底で一高の先輩方を感じているように思えたのです。あらためて、土浦一高の存在を感じると同時に諸先輩方のご活躍を祈念いたしました。最後になりましたが、本六〇号の編集にあたり、各方面の方々のご協力をいただき、貴重な原稿や写真をお寄せいただき厚くお礼申し上げます。今後とも進修同窓会をよろしくご協力申し上げます。

進修同窓会会報第60号
発行日 平成十五年十一月一日

会報編集委員会

編集委員長 横田尚義
編集委員 木島幸夫 谷中良雄
堀越博 鈴木志郎
宇田川仁一郎 鈴木淳一
宇田邦利 鈴木淳一
大山清 宮川茂
池井芳則 飯竹修
酒井貴美 谷口俊秀
江本春美

校内